



vol. 278 /
Apr. 30th 2019

4

一新紀元、気骨稜稜

New Era is Coming, Keeping our faith.

時代が終わり、新たな体制が生まれて、
変わらない志と、変化を求めて。
新たな研究室、新たなマガジンを特集します。

—Contents—

- P1~P4 特集 / 宮城先生インタビュー
- P5 修士六人、新たな一歩
- P6 研究室マガジン、衣替え

ランドスケープ・アーキテクトという職能 | 宮城先生インタビュー

Text_YAMAGUCHI

The Function of a Landscape Architect — the Interview with Prof. Miyagi

今年度より都市デザイン研究室教授として、ランドスケープ・アーキテクトの宮城俊作先生が着任された。新年度第一号の研究室マガジンでは宮城先生へのインタビューを敢行。一般にランドスケープというと、単に造園というイメージを持たれる諸君も多いことかと思う。その一方で、登録ランドスケープアーキテクト資格制度を有するランドスケープコンサルタンツ協会は、ランド

スケープ・アーキテクトの職能を、「人間の生存の本質環境を保全し、質の高い社会資本の整備に貢献し、良好な景観形成などを通じて観光資源の魅力を高め、地域創生に寄与する」¹と表現する。長年ランドスケープ・アーキテクトの第一人者として実務に関わってきた宮城先生のインタビューから、ランドスケープの本質、これからの都市に求められるデザインを紐解いていきたい。

聞き手：山口、松本

—先生の考えるランドスケープ・アーキテクトとは何でしょうか。

確かに日本ではランドスケープというと造園という言葉があるけれど、仮にランドスケープと造園で同じ土壌があるとすれば、それは自然です。もうちょっと言うと、僕は「土地」や「ランド」だと思ってんですよ。土地の中にはいろんなものがある。おおもとを辿れば確かに自然なんですけど、そこに人間が関わって長い時間かけて築き上げてきたものもあって、それも僕はランドスケープで扱わなくてはいけない一番土台となるものだと考えています。

土地に対する意識は高くなってきている

建物や道路ではない部分から都市を設計するという視点は、近代では在り得なかった。どうしてかという、土地というものは克服すべき対象だから。でもそれがあつた到達点まで来た時に、はて

それでいいのかと思ひ始めたのが、日本社会でいえば、ここ20年くらいじゃないかな。人口が増えなくなって、そもそもの経済活動が都市の中で行われるに仕がつて、これ以上その土地に対して働きかけて、大きく変えなくても経済活動が可能であるということになって。そうなるとなると、人間の生活や暮らしが依って立つ土地に直接関わらなくても生産が可能となる。一方でバイオロジカルな点でいうと、農業は絶対に必要じゃないですか。国土の保全という点から考えてもそこは必要で、だんだん土地に対する意識が高くなってきていると思いますよ。そこからアプローチするという事は重要だと、みんな本当は分かっていたはずなんです。でも経済原理に従えば、近代社会の下でそれだと、逆の方向に力が働くことになってしまう。そういうところを超えたところで物を考える時期になってきている。その中でランドスケープデザインは、どれくらい美しく空間や環境、景観を作り上げることができるか、というところに焦点を当てて行く職能だといえなくはないかな。



宮城俊作
ランドスケープ・アーキテクト

略歴
1957年京都府宇治市生まれ。千葉大学造園学科卒業、京都大学大学院修士課程修了、ハーバード大学デザイン学部大学院修了。米国内の設計事務所勤務。千葉大学緑地環境学科助教授等、奈良女子大学住環境学科教授を経て、2019年より東京大学大学院工学系研究都市工学専攻教授。1992年より設計組織 PLACEMEDIA パートナー。

¹ ランドスケープコンサルタンツ協会、<http://www.cla.or.jp/>



PLACEMEDIA ホームページ
先生がパートナーとして関わられている PLACEMEDIA のホームページには多様な言葉が踊る



アナザーユートピア
横文彦・真壁智治
建築家から見た都市のヴォイドは、ランドスケープからの視点とはまた異なる

実は僕はもともと植木屋になりたかった。家の実家の決まりで高校3年生の夏休みに修行で山に入らなきゃいけないということがあって。それがあって受験勉強どころじゃなくて、全然勉強していなかった（笑）。でも千葉大学が造園学科のある日本で唯一の国立大学ということもあって、気になるんだったら千葉大学に入ってもいいんじゃないの、という感じで行ってみたら、思っていたのと違った、やっぱり。植木屋さんになるためには高卒くらいで修行しなきゃいけないのだけれど、それとは全然違うということに気がついて。今みたいに大学についての情報が無いのよ、40年前って。だから将来どうなるかもわからず、大学で何をやっているかもわからず、なんとなく名前に惹かれてふっと行ってみたら、違う。その時気づいたのは、ランドスケープは都市に直接関わるといふ仕事であるということと、建築とは全く逆方向からアプローチするということ。もともと僕は建物には興味はなかったんですよ。確かに大学受験する時は他大学の建築学科も受けたし、受かってどうしようかと迷ったのだけれど、やっぱり最後、植物や自然が好きだったということに引っ張られましたね。

—先生がランドスケープという進路に入り込んだ時期はまだビル建設が盛んだったと思います。先生は其中でも早くから建築でないアプローチの重要性に気づいていらっしゃったのでしょうか。

40年前もなんとなく、これからの時代の潮流について、感じてはいましたけど。その辺の話は若い時に書いた難解な文章などがあるので、昔の雑誌とか本とかそれ読んでもらえば分かると思うんだけど（笑）。

それはさておき、ある意味でランドスケープ・デザイナーとかランドスケープ・アーキテクトって非常に逆説的と言うか、パラドキシカルと言うか。綺麗に物を作りたいとか、基盤になっているのは土地だとか言っているけれど、基本この機能が成立するためには開発行為なり建設工事が起こらないといけない。時々言われるのは、「宮城さんが一番美しいと思う、あるいは一番素晴らしい

と思う景観や環境はどんなものですか」と聞かれた時に私は、何もしなくてもいいと思える場所と答えます。でもそれだと商売にならないでしょう。綺麗な自然が残っている所の木を切って開発して、土地を造成して建物を建てて、その後また木を植えて作り直すというのは、とっても逆説的だよね。だけど近代から現代に至るまでのランドスケープの職能の成立は、そこに依存せざるを得なかった。

しかしこれからはちょっと違うかな、と感じますね。新たに建設行為というものが大きく発生しないとすれば、既存の物の価値をどのように変換していくかという行為になっていく。壊して作らないといけないという様な建設業とは違って、我々みたいなもともとある土地なり自然なりのポテンシャルをどう発現させるかに意識を持っている職能って割とフィットしている。ただし、建設できる総量が減ってきている中で、みんなもそういうことに気がつき始めているんじゃないかな。

行うべきは緑化ではなく、“re-vegetation”

僕はね、緑化という言葉が大嫌いなんです（笑）。本来ならば緑や自然の環境が入っていかにいところに無理矢理作るわけでしょ、だからあの言葉が大嫌い、できるだけ使いたくない。ただしベースになっている自然と完全に切り離された状態で、新たにそういうものを作ることを求められることは良くあるわけだね。その時に行うべきは、緑化ではなく、例えば水の循環や生物多様性からみると、“re-vegetation”という言葉だと思う。vegetationという言葉は植生でしょ。植物だけじゃなくて水の循環も、他の動物やものとの関係が成立してる状態のことを植生と言う訳だね。それを新たにもう一度都市の中に作るという観点が必要でしょう。ちょっと造園的な話に寄った内容から言うランドスケープの一面がそれかなと思います。

ヴォイドから発想して都市を考える

もう一つ、ソリッドとヴォイドという関係が発生するよね。都市の中には必ずその両方があるって、ソリッドの部分とヴォイドの部分のインターフェイスの部分をどの様に作り上げるかで、まちの美しさや、空間の豊かさだったり、パブリックスペースの多様性が出るわけだね。そういう時にどちらからアプローチするのか。今までは、例えばアーキテクチャ・アーバニズムやエンジニアリング・アーバニズムでは、やっぱり建物を建てたり、道路を作ったりするところから考えていた。そうではなくて、それをやらないところって必ず残る。それがどうあるべきかということから、つまりヴォイドから発想して都市を考えるというスタンス。近代はアーキテクチャ・アーバニズムが成立しないと近代の社会自体が成立しなかったから建物を建てることを中心として考えていたけれど、現代は逆の方から豊かさを追い求めるっていうこともあるはずだというのが一番大切なところかな。

—最近ではデベロッパーの人たちもヴォイドから考えるような動きになってきています。そこに先生のような方々が計画段階から入ることが良い再開発につながっているのでしょうか。

そうですね、造園だ、緑だ、庭だという話もありますけど、建築寄りだとか関係なく、もうちょっと抽象的な環境とすると、ヴォイドをどう扱うかということが、都市の中では一番大事なことになるって来ています。自然とのつながりだとかエネルギー消費の問題、防災もそうだね。

ランドスケープアーバニズムという運動は20世紀の終わりから21世紀の初頭にかけて欧米から出てきていて、横張先生もランドスケープ・アーバニズムをはっきりと打ち出して話をしていると思うんですけど、そちらのスケールは結構大きく、広域的な話です。一方で、僕はやっぱりサイトスケールの話なので、サイトデザインという言葉



新建築 1998年03月号
「ピクチャレスクとランドスケープ 風景に現れる自然象徴と生態象徴の視覚像」と題された、宮城先生の論壇が載る





保津川（桂川）に懸かる京都の山並み

使っているんです。そうすると、ものの形だとか、その空間が何で出来上がっているのかとか、マテリアルの問題というのが非常に密接に関係してくるから、どうしてもデザインに集中していくことになる。

一実務者が大学の教育に入ることにについて。

デザイナーが大学の現場にいるのは建築だったら当たり前ですね。ここも昔はいらしたわけだけど、建築との峻別ということもあったし、もともと都市工の方ってどちらかと言うと、デザイナーよりもプロジェクトマネージャーを育てていると感じます。プロジェクトマネージャーはすごく大事だと思いますよ、これから。

プロジェクトマネジメント の職能はすごく大事になる

公共事業に対して言うと、今までは官僚が一部そういうことをやっていたんだけど、今はもう公共事業に大きな投資をしてをもの作る時代じゃなくなっているから、民間デベロッパーの中でのプロジェクトマネジメントの職能というのはすごく大事になる。かつてはプランニングとデザインは明確に分離していたのだけれど、今は切れなくなっています。僕らは最初から関わって、出来上がったあとも、ちょこちょこ手直しをしながら、ずっと関わっているという形にならざるを得ない。

ここには専任の先生が二十数人いて、中にはもちろん防災だったり交通の先生がいるわけですけども、いわゆる都市計画の真ん中の部分でやっている方が数多くいる。だから五、六人いれば一人くらいちょっと違うやつがいてもいいんじゃないかと思っています。前の大学でもデザイナーを入れるための専任のポストがちゃんとあって、そうしないと教育がうまくいかないということがある。非常勤を呼んでくるということもできるんだけど無責任になってしまう。昔はなかなか、そういうことが許されなかった時代もあったんだけど、最近は誰もうるさく言わなくなってきた

いる。

土木の景観はやっぱり先生なんですよ、デザイナーではなくて。最後まで責任を持てるかどうかというのは大きくて。建築は最後建物が出来上がって施主に引き渡して、要望を聞きながら手直しして、というところまで責任持たなければならぬけど、土木は基本的に公共事業だから、それがやりにくいんだよね、仕事として。だからランドスケープはどちらかと言うと建築に近いです。

一先生が実際に一つの狭いサイトをデザインするにあたって、広いスケールとの関係をどのように考えているのでしょうか。

デザイナーのポジショニングという考え方がある。たとえば小さいサイト、それが庭だとする。庭という言葉は、人間のものすごく日常的な暮らしのスケールに対応しているでしょう。でも風景ってさ、もっと大きいじゃないですか。この庭と風景、両方ともランドスケープで扱う領域で、一つの仕事をしている時も、デザイナーのポジショニングがこの間で変わる。すごい遠いところから小さい空間を見ていて、あるいはちっちゃい空間に入り込んでそこから何が見えるか。このようにポジショニングが変化するということが僕らの仕事、職能で一番面白いところかな。京都で生まれ育つと、山に囲まれているからそのスケールで自分の町の暮らしを相対化して見ることができるんですよ。

スケールはずっとつながっている と認識してデザイン していること

自然環境の自己相似性という捉え方があります。例えば水と緑という話をしたときに、自分の家の坪庭に雨が降って水たまりができていて、そこに木の枝がかかっている状態みたいな話から、京都盆地が山にずっと囲まれていて、真ん中に鴨川が流れているというスケールまで。この間まで大体5段階くらいあるんですよ、スケールの

違いが。これがなんとなく染み付いていて、どのくらいのスケールを考えていけば良いか、ということがわかったりする。スケールを自由に行き来できるっていうこと、もっと言うとものを考えているときに、1/100000 くらいのスケールから、1/1 のスケールまで行ったり来たりできるし、できないといけな。スケールはずっと繋がっていると認識してデザインしているところが大きい。それが一番面白いところかなと思っています。

一土地のコンテキストを読むというところで、建築、ランドスケープ、都市デザイン、まちづくりで違いがあるのでしょうか。

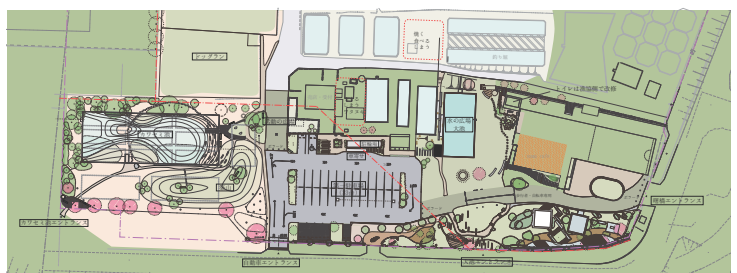
スタートの時点ではあまり大きな違いはないと思います。ただ実践では、ランドスケープは割と大きいスケールかもしれない。この間のプロジェクト報告会を聞いていて思ったんだけど、みんなは地元の人たちの切実に感じているいろんなニーズ、課題に真面目に答えようとしているじゃない、すごく真面目に。そうするとコンテキストを読むといった時の範囲がどうしても小さくなってしまふ。

それを典型的に感じたのが手賀沼の話です。ピオトープ作るのもいいんだけど、本当に考えなければいけないのは手賀沼全部がピオトープだということ。そう考えた時に、部分がどうあればいいかという考え方にすると、僕はあのデザインとは違う解もあると思う。自然の仕組みというのはものすごく広いから、大きな自然環境の構造の中の都市で人が実際に暮らしているという部分があって、さらにその中での、お隣とかそこから何が見えるのだというような話で建築のコンテキストになる。本当はもうちょっと広げて欲しかったし、広げると考えなきゃいけない先のことがもっと遠くになるんだよ。

バックキャストというのは、例えば 100 年後その土地がどうなって欲しいか、そこに行きつくためには、今なにをやらなきゃいけないかというスタンスです。そうすると、今実際にそこで生活していたり、暮らしていたりしてる人にとっては、そういう話は結構ぶっ飛んだ話になるわけ。



手賀沼プロジェクト
柏市にある手賀沼
フィッシングセンター
を含めた改修設計プロ
ジェクトで、通称カワ
セミ池をピオトープと
してデザイン



当然そういうところに入り込んでいて仕事をする
と、地元の人たちの信用を勝ち得ないといけない
から、具体的な課題には真摯に答える必要がある
訳だよ。一方でそれとは別に、大学でやっている
プロジェクトだから、君たちの方でもまた違う視
点を持っている必要がある。その両者の間が縮ま
れば縮まるほどいいと思うんだけど、無理に縮
めようとする結果として、だいたいのケースは狭
いところにすり寄っていくということになる。難
しいんだけどね。

一私（わたくし）の空間を設計するときと、パブ
リックスペースを設計するときで、デザイナーと
して意識は違うのでしょうか。

全然違う。住宅の庭園は、施主、そこで暮らす
人と一緒に作るという感覚ですよ。一方でパブ
リックなものになると、不特定多数が相手になる。
その場合の施主は誰なのかというと、直接は発注
してくれる役所だったりデベロッパーだったりす
るわけだけど、実際背後には納税者がいたり、
そこで働いたり、そこを訪れたりする人がいる。
その人たちと、自分の目線の高さを合わせるんだ
ろうね。自分が想像できないものって、作れない。

私は以前から、見たことがないものは作れない、
と言ってきた。明確にどういう形のものであって、
どういう色で、大きさを、ということを克明に記
憶していないといけないということではない。一
度人間の網膜に映ったものは記憶のどこかに沈み
込んでいくんだけど、何かのきっかけで刺激を受
けた時にそれがふわっと出てくることがあると思
う。見たことがあるということならば、コンピュー
ターの中で作り上げた像というものもそれもある
意味見ていると言えると思う。これは皆さんの世
代と僕らの世代、さらにはそれより上の世代と決
定的に違うところで、見ているスケールの幅が全
然違う。なぜかと言うと、今はスーパーミクロか
らスーパーマクロまで全部図像化されるでしょ
う。かつてはなかったことだけど、今ではそれが
幅を広げてくれている。

そういう期待がある一方で、ある狭いレンジの

スケールの中での空間体験がすごく希薄になっ
ている可能性がある。一番分かりやすいものが色と
光だと私は思っています。おそらく人工照明がな
かった時代の人達は、自然光の微妙な移り変わり、
心理学でいうところの閾値が、現代人とだいぶ違
うんじゃないかと思ったりするんですよ。光はす
なわち色、色はすなわち光なので、トーンの微妙
な変化をちゃんと知覚して認識できるかどうかだ
と思っている。比較しようがないからどうにも言
えないだろうけど、そういうのが当時の設計と
か、デザインとかに反映されていると思いますよ。

一先生の考える研究室のあり方とはどのよう
でしょうか。

せっかく先生が3人いるんだから、その上手
いシナジー効果が生まれるような形があるとい
いな。上手い組み合わせがどうなるのかという…
研究室会議なるものも今日が初めてだから、まだ
わかりません（笑）。

都市デザインは幅が広いでしょ。仕組みからソ
フトウェア、行政、実際のフィジカルデザイン
まで。デザインという言葉の多義性はここ10年
20年すごく広がった訳だし、僕はこうでないと
いけないなんて思っていない。逆に言うとう
大学なので、研究室のあり方は学生と教員の間の関係で
出来上がるもの。学生の皆さんとどういう組み
合わせがベストなのかを考えて決めればよい。皆
さんとの関係で出来上がるものなので、一人一人に
合わせて私自身はいかにようにでも変われます。

一最後に研究室の学生に一言お願いします。

ここはずっとプロジェクトという形でフィール
ドを持ってしっかり向き合っているし、リアリ
ティに対してしっかりと地に足がついた状態で
やってきているので、それらは継続して欲しい。

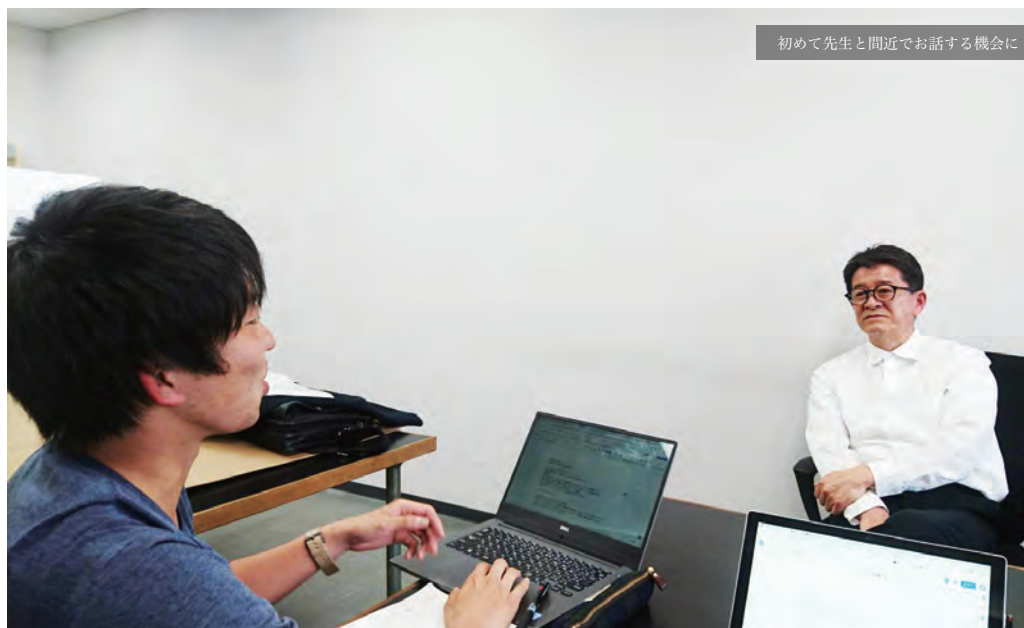


遠くに物を投げられるか

一方で、少しはみ出るというか一学生らしいい
という言葉で言うのは嫌なんだけど一遠くに物
が投げられるかということも欲しい。なんで遠
くに物を投げた方がいいかって言うと、そこま
で投げられるって言うことは、遠くの状態を自分
で想像しているということだから。そこから現在
までを見返す時の視程が長くて、幅が広がる。
それが若い時の魅力でしょう。卒業して、社会に
出て、実際に仕事始めると、多くの人は愕然とす
るわけですよ、理想と現実のギャップに。僕はラ
ッキーでそういう経験をほとんどしていなくて、
フラフラとアメリカの大学院に行って、アメリカ
の設計事務所まで働いて帰ってきて、いきなり自分
で仕事を始めて。それでもやっぱり最初は縛られ
たり、苦しみられたりすることがたくさんあっ
た。それでも遠くに自分を持って行けるという
のは、大事なかなと思いますね。頑張ってください。

お忙しい中時間をとっていただいた宮城先
生、本当にありがとうございました。

ランドスケープという都市への視点を、時代の
変わるいま、学生はもう一度捉える機会となりそ
うです。



修士 6 名、新たな一歩

Six Master Students Take a New Step.



▲ 4.12 東京大学大学院入学式にて

今年度は新しく修士のメンバーが 6 名加わりました。外部からも 3 名ということで、より幅広い視点から議論が繰り広げられることが期待できます。

まだ顔合わせして 1 ヶ月ながら、懇親会や研究室会議、授業、プロジェクト等を通して早くもお互い打ち解けてきた様子です。

今回はそんな彼らの“あれこれ”をご紹介します。

凡例

- ①生年月日 ②出身地 ③来歴
- ④研究室を選んだ理由 ⑤好きな街や空間
- ⑥行きたい所 ⑦趣味 ⑧特技
- ⑨尊敬する人 ⑩自分を何かに例えるなら
- ⑪俺 / 私のここを見ろ！ ⑫今年度の目標



應武 遥香

美化・研究室旅行係 / マガジン編集部
Haruka Ohtake

- ① 1996/10/31 ② 千葉県白井市
- ③ 県立船橋高校→東京大学工学部都市工学科
- ④ 地域特性に基づいた都市空間の設計に興味があったから
- ⑤ 浪江
初めてまちの人と関わった場所だから
- ⑥ 鉄道のあるまち

- ⑦ 旅行
- ⑧ 早起き
- ⑨ 社会人の同期（高い志を持って社会に出たから）
- ⑩ 李徴
- ⑪ 傍にいるうさぎさん
- ⑫ ぼーっとする時間を減らす

早寝早起



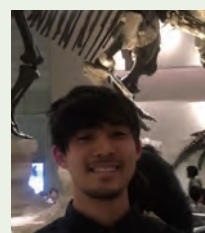
佐鳥 蒼太郎

研究室会議係
Sotaro Satori

- ① 1996/10/25 ② 東京
- ③ 海城高校→東京大学工学部都市工学科
- ④ 実際に形あるものを作っていくことに近い研究室だったから
- ⑤ 呉
卒論で扱ったから、まちと軍との関係が今でも強い
- ⑥ 大湊

- ⑦ 野球 / ミリタリー / アイドル
- ⑧ 本を読むのが早い
- ⑨ 特にいません、これから見つけます
- ⑩ 国産車（割と高い水準で全部まとまってる）
- ⑪ 雑務処理能力
- ⑫ 65kg まで体重を落とす

最後は
気合



砂川 良太

外部対応係
Ryota Sunakawa

- ① 1996/2/27 ② 静岡県磐田市
- ③ 浜松北高校→早稲田大学創造理工学部建築学科
- ④ 建築と都市が大好きだから
- ⑤ 漁村集落
きれいな海と建築のディテールに感動！
- ⑥ 城崎温泉

- ⑦ 散歩
- ⑧ タコライス
- ⑨ 吉阪隆正、東松照明、栄久庵憲司
- ⑩ ヒツジ
- ⑪ たまに鞆を忘れます（注意してください）
- ⑫ 友達 100 人つくる！

質素
清潔
品位



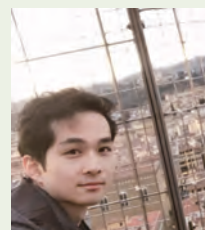
西野 一希

コンパ係 / マガジン編集部
Kazuki Nishino

- ① 1996/10/1 ② 大阪府岸和田市
- ③ 西大和学園高校→東京大学農学部緑地環境学科
- ④ プロジェクトに魅力を感じたから
- ⑤ 日本庭園
水と植栽と岩の調和、綿密な意匠に引き込まれるから
- ⑥ 足立美術館（島根県）

- ⑦ 野球観戦
- ⑧ 大阪環状線の駅名を早く言う
- ⑨ 場を盛り上げるのが上手な人
- ⑩ 近所の子犬（臆病なくせによく吠える）
- ⑪ 全身 GU コーデ
- ⑫ 自分の言動・選択に責任を持つ

謙虚に貪欲
拓くは我道



沼田 康佑

備品・美化係
Kosuke Numata

- ① 1995/9/20 ② 東京都稲城市
- ③ 駒場東邦高校→東京大学工学部都市工学科
- ④ 何かをつくりだすことに興味があったから
- ⑤ 西新宿
超高層ビル群が好きなので
- ⑥ マンチェスター

- ⑦ ビリヤード、スポーツ観戦
- ⑧ イタリア語
- ⑨ 朝から活動できる人
- ⑩ 3 等星
- ⑪ 存在（大学にいるのが珍しいので）
- ⑫ ゆとりある生活

眠いときは
寝る



宗野 みなみ

IT・広報係 / マガジン編集部
Minami Muneno

- ① 1996/7/24 ② 神奈川県横浜市
- ③ 湘南高校→横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科
- ④ 自分の興味がマッチしていたから
- ⑤ 横浜野毛の飲み屋街
ヒューマンスケールで構成された空間とこちゃこちゃ感、新旧の融合
- ⑥ イスタンブール、ポートランド、ハバナ

- ⑦ 旅行、雑貨集め
- ⑧ 自信満々で道に迷うこと
- ⑨ 大学の友人
- ⑩ 電気ケトル
- ⑪ 変幻自在の前髪（寝癖）
- ⑫ 専門家の立場から都市への提案をできるようになる

いいアイデアは
いい睡眠から

研究室マガジン、衣替え

Layout Rearrangement of the Urban Design Lab. Magazine

Text_YAMAGUCHI

新元号が発表され、平成の時代が終わりに近づく4月。宮城先生をお迎えして新たな局面に突入する東京大学都市デザイン研究室ですが、新年度から研究室マガジンの装いも変わります。新たなデザインのコンセプトなどを、新・編集長である前山に聞きました。

● 3年ぶりに4ページ紙面が復活！

見出しやInformation欄といった昨年度の洗練されたデザインは受け継ぎながらも、守りに入らず、常に変化していきたい、という編集長の方針をうけ、基本ページ数を4ページとしました。これによってA4ピラ形式よりも、各担当が自由にやりたいことが気軽に・自由に

レイアウト、表現できる場として、見開きの2ページが追加されました。また表紙部分も特集や内容に併せて、変化を出すことも検討しています。お楽しみに！

● これからのマガジン、新たな取組み

自由なページを増やしたことで、新たな企画や連載を復活させていく予定です。元号も変わり、新体制に入ったということで、時代を俯瞰するような企画ができればいいのではないかなど、まだ企画段階ですが、今年度も面白い取組みを積極的に行っていく予定です。

また、昨年度から研究室にてSNSの積極的利用を行っており、研究室で行っているプロジェクトなどを発信しています。マガジンの発刊もお知らせしていますので、是非チェックしてみてください！



▲新たなマガジンの表紙

● 新年度の抱負

文章そのものの向上はもちろん、それだけでなく、誌面全体を使った「伝え方」ということに挑戦していきます。今年度もどうぞ、宜しくお願い致します！



@UDL_UT

@urbandesignlaboratory

ごあいさつ

昨年度の一年間、編集部として活動しながら頭に浮かんでいたのは「研究室マガジンとはどういう存在なのか」という問いでした。十四年間続いてきたマガジンは研究室の活動を発信する一つのメディアであり、変化を記録するアーカイブでもあります。「都市デザイン研究室」の名前が冠された以上、この誌面は研究室そのものを語る資料として残していきたいです。編集部への責任は決して軽いものではありません。

一方で、この研究室マガジンという媒体の面白さは、未熟な学生という個人の視点で語られることにあるとも感じました。企画や文章の内容はもちろん、言葉の表記、タイトルやレイアウトのすべては、それをつくる個人の「伝えたいこと」を反映しているはずです。研究室を代表する責任を負いながらも、各人の「これをやりたい」という、身勝手さを尊重した誌面をつくるのが、新編集長としての私の目標です。

今年度の編集部は新たに修士一年の應武、西野、宗野の三名を加えた計七名で活動し、それぞれの目を通した「都市デザイン研究室」を発信していきます。どうか暖かく見守っていただけますと幸いです。

十五代編集長 前山 倫子

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

4.5 2019年度研究室がスタート



新体制での第1回研究会と新メンバー歓迎会を行いました！様々なバックグラウンドで多様性が一段と増し、花見形式の歓迎会も大いに盛り上がりしました。(M2 仙石)

4.16 B3のまちあるき演習に参加！



先生方と東京を歩き回る演習。建物の建ち方や道路の構成など、全ての街並みには背景と理由があります。普段の自分に「もっと生きてんじゃねーよ！」と言いたい。(M1 宗野)

4.11 プロジェクト報告会を行いました！



新M1だけでなく多くの方に来て頂き、各PJを背負って発表する責任を強く感じました。この責任感を忘れず、2019年度も頑張りたいと思います。(M2 箭川)

4.20-22 復興デザインスタジオ現地調査



3日間にわたって西日本豪雨で大きな被害を受けた愛媛県西予市野村町を訪問しました。これから半年間、野村町の事後復興と事前復興に取り組みます。(M1 佐島)

新たなメンバーを迎え入れ、今年度のプロジェクトが始動しました。M1は慣れない活動や作業の中でも切磋琢磨し、これから研究室の柱へと成長を見せてくれるでしょう。

4月のWeb マガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



4月初 手賀沼に新たな池が誕生！

2018年度に設計した環境学習ゾーンが竣工しました。今後色々な人や生き物に利用してほしいと思います。(M2 藤原)



4.19 上野PJ空きスペース活用MTG

上野PJにて、ビルオーナーの方々と、町の課題解決に向けた顔合わせとプレ調査の共有を行いました。(M2 小田島)

5月の予定

Lab Meeting
9th, 16th, 29th

10th (Fri)	富士吉田PJ 現地調査 & 展示会場検討
11th, 12th	浦安 百緑商店街
12th, 13th	納の浦 アンケート回収 & 現地調査
16th (Thu)	B4 歓迎会
17th (Fri)	上野PJ 第2回勉強会
17th, 18th	小高PJ まちなか菜園講習会
18th-20th	三国祭 研究活動成果展示
23rd-26th	内子PJ 現地調査 & 森家掃除
随時	富山PJ パブリックライフ調査

✖ 編集後記

時代の変わり目に立ち会える機会は限られる。担当した本号で、多くの節目を迎えられたことは光栄である。その一方で、普段の生活も毎日絶え間なく流水の様に移り変わっている。今日が終われば平成が終わり、長く慣れ親しんだ時代から変わることに対して寂しさも覚えるが、今の持ち物にとらわれずに、生きていくことが出来るのも今のうちだからと、自分の歳を数えているこの頃。(M2 山口)